

# 郷土室だより

第 2 号

昭和48年 9月15日 初刷

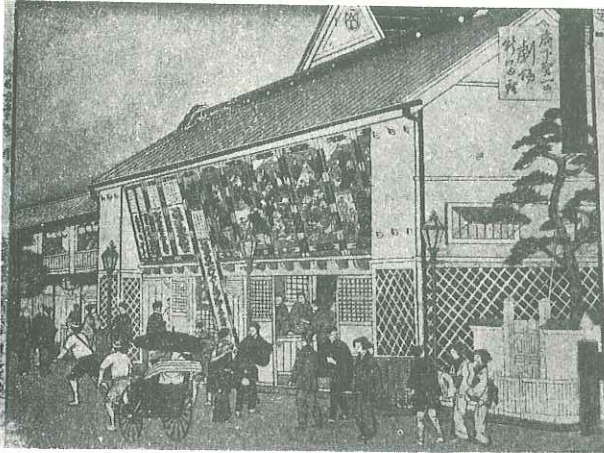
平成 6年 3月31日 2刷(500)

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 3543-9025



## 古今東京名所

### 府下第一の劇場新富座

(木挽町から浅草に移った森田座は、明治五年に許可をえて新富町に移って、守田座の櫓を挙げ、同八年新富座と改称、同一年一二月新富演劇会社となった。座長は一二世守田勘弥である。)



## 森田座、芝居口上

(京橋図書館、尾島文庫)

\* \* \*

## 中央区と演劇

中央区の地域は、江戸時代、日本一の城下町、江戸の中枢商店街として、諸問屋が密度高く分布する一面、生鮮魚類の集散地たる魚河岸・四日市があ

り、加えて葺屋町・木挽町などの娯楽街があって、江戸歌舞伎の中心地として、賑わっていた。大口需要者たる大名屋敷にも近いということ、堀割が四方に通じて、舟楫の便に富むことなどが、この繁栄を招いたのであろう。

江戸日に千両といつて、魚河岸と吉原遊廓と芝居町の三者は、日に千両の金の落る所と称された。

各座の幟高らかに翻る所、多くの茶屋が立ち並び、操芝居や猿芝居、見世物小屋まで出て、客寄せの鉦や太鼓の音賑やかに、いやが上にも、人々の遊山心を揺り動かすのであった。

娯楽のすくなかった江戸時代には、芝居見物は婦女子のあこがれの的であり役者の衣裳は、染色・鳩柄、頭巾の形や帯の結び方にいたるまで、忽ち市井の流行となって反映した。

江戸歌舞伎の伝統を継承して、中央区の地域内には、現在も、歌舞伎座をはじめとして、新橋演舞場、明治座の三大劇場が鼎立してその妍を競いあっている。

中央区と演劇との結びつきはかくも深く、日本の演劇史上に重要な地位を占めているのである。

### 区内劇場街の旧地

#### ◇中橋南地

慶長一二年(一五九六)は、江戸城内に五層楼の天守閣の落成を見た年である。

この年、家康は、当時京都にあって人気を独占していた出雲阿国を江戸へ招致して、江戸城本丸・西の丸の間にある、舘世・金春の能舞台で、女歌舞伎を観覧した。

これが江戸歌舞伎踊の行なわれた初めで、その後、その亜流が陸続江戸へ下り、江戸中橋南の藪原に小屋掛けして興行を行なうようになった。

元和八年(一六二二)京都から江戸へ下った、歌舞音曲の名人猿若勘三郎は、時の奉行板倉四郎右衛門に劇場建設を願いで、四海泰平の御祝という願意が通って、中橋に芝居櫓を挙げたのは実に寛永元年(一六二四)三月。座名は初め猿若座で、後に中村座と改めた。

中村座は江戸歌舞伎の開祖だけに、芝居道に種々の慣例を残した。

たとえば、最初、櫓の上で人寄せの太鼓を打ったところ、お城に近い場所なので、旗本の登城の太鼓に紛らわし

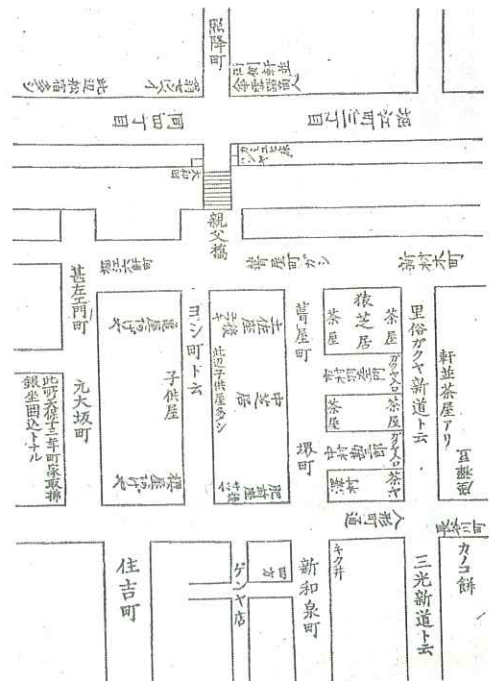
いと禁止されて、舞台で打つことになった。これが今日の着到太鼓の始めであるという。

寛永五年(一六二八)四月三日、中橋の歓楽街から火を発して、猿若座その他七軒の芝居小屋が焼失した。幕府はこれを機会に、劇場街があまりお城に近すぎるとの理由で、寛永九年(一六三二)五月これらの芝居小屋をすべて祢宜町へ移転を命じたのであった。

江戸初期に、最初の劇場地となった中橋南地は、現在の八重洲大通りと、東海道の交叉する所に架っていた中橋の、南側に当る。現在、越前屋ビルやブリジストンビルの建つあたり、あるいはも少し南よりの丸善付近でもあったろうか。しかるに、昭和三年七月、「歌舞伎発祥の地記念碑」を建設するに当って、閑地を求めかねて、旧地から五〇メートルも離れた京橋橋畔に建てたのは、いささか場違いの感なきをえない。

#### ◇祢宜町

寛永九年(一七二四)中橋にあった芝居小屋の移されたという祢宜町は、寛永江戸図に吉原の北隣の町名として記されている。後の長谷川町で、『堺町猿若勘三郎座由緒書』には、「此節芝居所者祢宜町にて仕候。右祢宜町は



寛政頃の葺屋町—照降町→親父橋→ヨシ町の通りを、現在バスが通っている。

長谷川町横町之事、私名せった町と申候」といってある。現在は日本橋堀留町東部の、人形町に接するあたりが、その旧地に相当する。

ともあれ、祢宜町が隣接地吉原の繁昌と相まって、賑やかな歓楽地をなしていたことは、『吾妻物語』のリズミカルな文章によってうかがうことができる。

#### ◇堺町・葺屋町

中橋南地の中村座が祢宜町に移された翌年、寛永一〇年正月には、堺町に都伝内の櫓が許され、翌一年三月には、泉州堺から江戸に下った村山又三

郎が、堺町に村山座を興した。これが後の市村座である。慶安四年(一六五二)に至って祢宜町にあった芝居小屋はことごとく堺町に移された。

当時の堺町は、上下両町に分れており、村山座も猿若座も上堺町に開場して、上堺町ばかりが繁栄するので、名主近藤喜兵衛は上下堺町の繁栄を平均させようとして、奉行所に願ひ出て許可をえ、抽せんの結果、猿若座は再度移転して、下堺町に開場することになった。上堺町は、明暦の大火後地割改正で葺屋町と改称し、下堺町はたんに堺町と呼ばれることになった。

この地はその後二百年ほど劇場街で

あったから、記すべきことも多い。今は『寛天見聞記』によって幕末頃の景況を見ると、

其頃葺屋町市村座は、都伝内とかはり、堺町中村座は桐長桐とかはる。中の芝居には、子供狂言又は竹田大からくり、或は曲馬能狂言など絶ず有。：寛政六七の頃、土佐座にて仮

大仕掛を初て興行せり。河岸の芝居は猿狂言を専らとし、折節に珍らしき物を見世物とす。手妻早業杯何れも両国のこも張り芝居に同じ。

とあってずい分と賑わっていたことが知れる。

しかるに、天保の改革に際して市中風俗取締りのためとあって、堺町葺屋町両狂言座、操座芝居そのほか芝居関係に携っていた町家の分も残らず、浅草聖天町に近い小出伊勢守の下屋敷跡へ移転を命ぜられた。劇場街がこの地を去って更に百有余年を経た今日、堺町の町名も葺屋町の町名も消え、目安となっていた東堀留川は跡方もなく、現行の地図を見ただけでは、旧地は皆目分らなくなってしまうが、日本橋芳町二丁目がその旧地なのである。

◇木挽町の劇場街

寛永一九年（一七三四）、木挽町五

丁目に山村座が櫓をあげ、その数年後同じ木挽町に河原崎座が設立をみた。

明暦の大火後、幕府は江戸における芝居興行地を、堺町二丁（後の堺町と葺屋町）、木挽町五・六丁目の四ヶ町に制限したので、万治三年（一六六〇）には、森田太郎兵衛が木挽町に森田座を開いた。

江戸時代、中央区の地域には、四座の大芝居が並び立って芸を競っていたわけである。

しかるに、正徳四年（一七一四）に名高い絵島生島事件がおきて、山村座は取潰しの厄に遭い、ついに再建を許されず、以後、中村座・市村座・森田座をもって、江戸三座と称するようになった。

森田座は、天保の改革まで、長くこの地にあり、一時浅草の猿若町に移って興行を続け、明治になって、守田座の名をもって再び区内新富町に舞い戻って来たのである。

森田座の旧位置は、現在の銀座東六丁目一三番地内というより説明のしようがないが、川尻清潭氏は記して、

現在の歌舞伎座の向ふ横町、今では昭和通りと呼ばれているあの一部分であったらしく、明治三十三年頃、

歌舞伎座の方から行って其往来の右側の中程に、新川の酒問屋鹿島清兵

衛の経営していた玄鹿館と名付けた写真館のあった処が、森田座の跡と言う事。それは同館を建築する時、地行の際の土中から、土台石や劇場の木材が掘出されたので、立証された話が伝わっています。（『歌舞伎座』から）

◇築地小劇場

築地小劇場が、関東大震災で焼野原となった築地にその地を卜して、初の開場のドラを鳴らしたのは大正一三年（一九二四）六月一日であった。留学先のドイツで、関東大震災による凶変を知った土方与志は、急拠帰国すると、小山内薫と提携して、帰国の途次練り上げてきた案を実行に移し、この小劇場を建設して、演劇革新の炬火を掲げたのであった。その第一回興行は行詰っていた日本の演劇界に強烈な印象を与えずにはおかなかった。

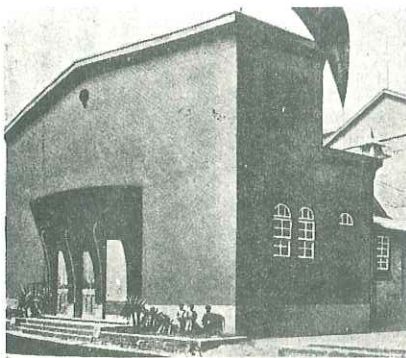
金子洋文は言っている。  
 がんがん頭をなぐりつけるような白が、次から次からおそって来ました。まるでわからぬ。各自が何を言っているかまるでわからない。しかも私は自分の身が堅く苦しくなっていくのを感じました。……立派な誕生です。くさった日本の劇界に対

する宣戦です。（『築地小劇場第二号』）

舞台装置・照明・演出、すべてが新しく、すべてがわくわくする感動に充ちていた。私の若い日の感激も二重映しになって、その感動と重なり合う。

歌舞伎の伝統からまったく解き離れた、新しい思想の器、新演劇の拠点築地小劇場は、小山内薫の死によって分裂し、やがて経営難から解散の悲運にみまわれ、ついに再建の機をえずにしまった。

築地も区画整理によって、町並みは変ったけれど、築地二丁目の勧銀の横丁を、本願寺へ向って入って左側の京橋電報局の所（築地二ノ二ノ一七）が栄光に輝く築地小劇場の旧跡である。



（築地小劇場）

演劇関係図書目録 その1 歴史篇

- ・京橋図書館所蔵
- ・演劇の歴史を概観できるもので、古いものを中心に選んだ。
- ・能、狂言等については、別の機会に譲った。

|               |        |            |             |                  |            |
|---------------|--------|------------|-------------|------------------|------------|
| <b>総説</b>     |        |            | 操浄瑠璃の研究 続編  | 近石 泰秋            | 昭40        |
| 劇壇の最近十年       | 坪内 雄蔵  | 大 6        | 日本芸術史研究     | 和辻 哲郎            | 昭46        |
| 日本演劇史         | 伊原 敏郎  | 大13        | <b>歌舞伎</b>  |                  |            |
| 近世日本演劇史       | 伊原 敏郎  | 大13        | 歌舞伎叢書       | 佐々政一編            | 明43        |
| 日本劇場史         | 後藤 慶二  | 大14        | 続々歌舞伎年代記 乾  | 田村成義編            | 大11        |
| 日本演劇の研究 第1~2集 | 高野 辰之  | 大15<br>昭 2 | 続歌舞伎年代記     | 石塚 豊芥子           | 大14        |
| 劇場新話ほか(燕石十種)  |        | 大16        | 歌舞伎劇の経済史的考察 | 山田 勝太郎<br>藤田 儀三郎 | 昭 2        |
| 日本演劇の起源       | 呉 文炳   | 昭 4        | 歌舞伎概論       | 飯塚友一郎            | 昭 3        |
| 国劇要覧          | 演劇博物館  | 昭 7        | 近世演劇考説      | 黒木 勘蔵            | 昭 4        |
| 国劇史概観         | 高野 辰之  | 昭 9        | 演劇史研究       | 演劇史学会編           | 昭 8        |
| 観劇五十年         | 伊臣 真   | 昭11        | 上方演劇史       | 堂本 弥太郎           | 昭 9        |
| 伝統演劇瑣談        | 滝田 貞治  | 昭18        | 近世劇壇史 歌舞伎座篇 | 木村 錦花            | 昭11        |
| 日本戯曲史         | 河竹 繁俊  | 昭39        | 日本演劇物語史     | 渋谷 吾往斎           | 昭14        |
| 日本劇場史の研究      | 須田 敦夫  | 昭41        | 歌舞伎作者の研究    | 河竹 繁俊            | 昭15        |
| 日本演劇全史        | 河竹 繁俊  | 昭43        | 演劇五十年史      | 三宅 周太郎           | 昭17        |
| <b>浄瑠璃</b>    |        |            | 国劇研究        | 守随 憲治編           | 昭17        |
| 浄瑠璃史          | 高野 辰之  | 明33        | 歌舞伎史の研究     | 河竹 繁俊            | 昭18        |
| 義太夫大鑑 上・下     | 秋山 清   | 大 7        | 歌舞伎年表 第1~8巻 | 伊原 敏郎            | 昭31<br>~38 |
| 文楽の研究         | 三宅 周太郎 | 昭 5        | <b>新劇</b>   |                  |            |
| 新修絵入浄瑠璃史      | 水谷 弓彦  | 昭11        | 築地小劇場史      | 水品 春樹            | 昭 6        |
| 浄瑠璃研究書        | 木谷 蓬吟  | 昭16        | 日本新劇史 上・下   | 秋庭 太郎            | 昭30        |
| 人形浄瑠璃史研究      | 若月 保治  | 昭18        | 山本安英舞台写真集   | 木下 順二編           | 昭35        |
| 古浄瑠璃の研究 第1巻   | 若月 保治  | 昭18        | 日本新劇史       | 松本 克平            | 昭41        |
| 浄瑠璃史          | 黒木 勘蔵  | 昭18        | 新劇年代記 3巻    | 倉林 誠一郎           | 昭41<br>~47 |
| 浄瑠璃操芝居の研究     | 横山 正   | 昭38        | 私の築地小劇場     | 浅野 時一郎           | 昭45        |

催 物 案 内

◇東京を語る会 第10回

日時 48年9月22日(土)

午後2時~4時

演題 「江戸図屏風について」

講師 明大教授 萩原 竜夫 先生

最近発見されて、学界の耳目を聳動させた、江戸図屏風について今回萩原先生から、専門的見地からする解説をスライドを見ながら、うかがうことになりました。又とない好機会です。お見逃しなように。場所は当館鑑賞室

◇演劇講座 会場当館鑑賞室

期間 9月29日~10月20日

時間 各回とも、午後2時~4時

第1回 9月29日(土)

日本演劇の生まれるまで

国立劇場 芸能調査室 服部 幸雄 先生

第2回 10月6日(土)

近松浄瑠璃の完成

法政大学教授 広末 保先生

第3回 10月13日(土)

歌舞伎と江戸文化

国立劇場 芸能調査室 服部 幸雄 先生

第4回 10月20日(土)

築地の思い出 千田是也先生

(詳細は別紙刷物をご覧ください)